

Title	慶應義塾図書館蔵横型本『天狗の内裏』解題・翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1992
Jtitle	三田國文 No.17 (1992. 12) ,p.35- 50
JaLC DOI	10.14991/002.19921200-0035
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19921200-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶応義塾図書館蔵横型本『天狗の内裏』 解題・翻刻

石川 透

解題

慶応義塾図書館には、室町後期写の縦型本の『天狗の内裏』が存し、現存最古本として既に『室町時代物語大成』九に翻刻もなされているが、ここに紹介する『天狗の内裏』は、それは別の、横型本の古写本である。

『天狗の内裏』の写本は、『増訂室町時代物語類現存本簡明目録』に十一本が記されているが、江戸時代中期以降の段物仕立ての写本を含めるならば、その数は相当数にのぼる。しかし、江戸時代初期以前の写本は、数本にすぎない。ここに紹介する横型本『天狗の内裏』は、図書館の目録では室町末期の写本として、前記縦型本に準ずる古写本であるが、なぜか『増訂室町時代物語類現存本簡明目録』に遺漏されてきた。

本書を『天狗の内裏』諸本と比較すると、本文的には、『簡明目録』番号(一)の慶応義塾縦型本に一番近く、その誤脱を補う点が多い。また、『簡明目録』番号(二)(三)の諸本にも近い面がある。この(一)(二)(三)の系統は、刊本系とは別の、

古写本系統ともいい得る系統であり、本書はまさにこの系統に属しているのである。ただし、これら諸本との校異をとつてみると、他本にはみられない独自の文や語句も散見している。例えば、

びしやもんの御ちからならては、いかてかかなひかたしとおほしめし(三丁表)

つまの太てんくを御たのみあれ。それをいかにと申に、大てんくは(一八丁表)

とそつのさんくわんとは、やまもとやま、みつもとみつ(三〇丁裏)

と、かやうにいましめ候なり。じやいんかいとは、つまのうへに(三五丁表)

等である。これらの事例が、他本より古態を示しているとか、より優れているとかは即断できないが、文意は通り易くなっていることが多い。

また、(一)(二)系統本では、本書四四丁表の「もちたるなり。かれをぬすめと申へし」から、四五丁表の「あいかまへて、

なんしか、てんか」までが欠落している。(三)本も記述が異なっており、本文的な成立過程を伺わせる材料となるであろう。実は、この部分は、別系統と思われた(四)の刊本系統の本文が本書の本文に近く、室町物語によくみられる、複雑な諸本関係を示していることがわかるのである。

『天狗の内裏』には、対句対文的な表現が多いせいか、誤脱が間々見られ、本書もその例外ではないが、全体的には本文上整った本といえるであろう。なお、本書の末尾は一丁ほど欠丁している。

本書の書誌は以下の通り。

番号、一〇X―四二九―一
形態、袋綴・横型、一冊
時代、「室町末・近世初」写
寸法、縦一五・八糎、横二二・九糎
表紙、黒色表紙
外題、なし
内題、なし
扉題、「天狗の内裏」(本文別筆)
料紙、斐楮交漉紙
丁数、四六丁
行数、半葉二二行
字高、一四・〇糎
奥書、なし
印記、「慶応義塾図書館蔵」(朱)

翻刻に際して、本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に句点・読点・「」括弧・手擦れによる不読記号(□)等を記し、改行も加えて読解の便宜をはかった。

最後に、本書の閲覧と翻刻掲載の御許可を賜った慶応義塾図書館に厚く御礼申し上げます。

天狗の内裏

さるほとに、はうくわん殿は、七つの御とし、くらまのてらへ、のほらせたまひて、よきにかくもんめされけり。もとより此きみは、ひしやもんの御さいたんのわかきみにてましませは、七つの御とし、ほけきやう一ふ八くわん、八つの御とし、大はんにや六百くわん、くしやきやう三十くわん、ふんすいきやう十四くわん、けごん、あごん、ほうどう、はんにや、七千よくわん□、かくもんしたまひける。さて、さうしにとりては、げんじ、さころも、いせ物かたり、こきん、まんよう、百よてうのくさつくし、八十てうのむしつくし、おにかよみけるちしまふみまで、ならひたまふそありかたき。

みなもと、しよそんにおほしめすやうは、われ、かたのことに、かくもんきわめてありけれ共、さんかくにたちいらす、さんがくせんとおほしめし、十さいの御としより十三のはるまでに、一千七百そくそきわめたまふ。

ある日の事なるに、みなみのつほにいてさせたまひ、はなを

なかめておわするか、けにやまことにわすれたり、わらは、一
たひ、みやこかたにて、おやのかたきをうつへきか、まことや
らん、われらかせんぞ、八まん太郎よいしゑは、十五の御とし、
かといてなされ、なをてんかにばつしたまふとうけたまわる。
われらも、おそれながら、せんそをつき、十五のとし、かとい
てなすへきか、されは十五のとしまで、此やまにて、いたつら
に月日をおくりけるよ。しかるに、此やまに、まことやらん、
てんぐのたいりとして、おとにはきけと、いまたみす、なにとし
て、このたいりをおかまはやおほしめし、雨のふるよもふら
ぬよも、かせのたつ日もたゝぬひも、百日百よかそのあいた、
かなたこなたのきくさを、たつねめくらせたまへとも、てんぐ
はもとより、じゅゆうじさいの事なれば、てんぐのたいりはみ
ゑさりけり。

みなもと、しよぞんにおほしめすは、われらかやうに、かく
もんきわめてありけれども、びしやもんの御ちからならては、
いかてかなひかたしとおほしめし、三十三のこりをとり、
ひしやもんたうにまいりたまひて、わにくちちやうどうちなら
し、「なむやたいしいひのたもんでん、ねかわくは、御ちかひ
に、てんぐのたいりを一めみせてたひたまへ」と、かんなんく
だいていのられける。

ありかたや、あかつきかたの事なるに、ひしやもんでん、八
しゆんはかりのろうそうとけんしたまひて、うしわか君のまぐ
らかみにたゝせたまひて、「いかにうしわか、まこと、なんじは
てんぐのたいりかのそみかや。そのきならは、あす、みさかく
ちにいてゝまで。わらは、おしゑん」と、かきけすやうにうせ

たまふ。

みなもと、此よしきこしめし、なのめならすおほしめし、八
十二のかすのらいはいまいらせて、げかうのかねをうちなら
し、みさかくちにいてさせたまひて、御りしやうは、いまやお
そしとおまちある。

かたしけなくも、ひしやもんは、はたちはかりのほうしとげ
んじ、せんのころもに、もんしゆのけき、みなすいしやうの
じゅすつまくり、げゝんしゆじやうのくつをはき、うしわかき
みのさきにたち、「いかに、うしわか、てんぐのたいりかのそみ
ならは、これよりも、さんかいにのほつてたつぬる事ならば、
ごしきのつちかあらわれは、しろきつちおはゆんでになし、あ
かきつちをはめてになし、あをきつち、くろき、きなるつちを
は、さんかひむあんのちりとさためて、たゝいつたうにふみな
らして、いそく事ならば、かならずたいりはあるへきそ」と、
かたくりしやうなされて、かきけすやうにうせたまふ。

そのゝち、みなもと、きこしめし、なのめならすにおほしめ
されて、さんかいにあかりて、たつねたまへは、けに御をしへ
のことくつちあり。

みなもと、此よし御らんして、わらは、此ころ百日百夜かそ
のあいた、かなたこなたのくさ木を、たつねめくりてありけれ
とも、かゝるきどくはなかりしが、ほとけはあらはしたまふか
や、ありかたさよとおほしめし、しろきつちおは、ゆんでにな
し、あかきつちおは、めてになし、あをきつち、くろきつち、
きなるつちをは、さんかいむあんのちりとさためて、たゝいつ
たうにふみならして、いそかせたまひければ、ま事に、てんく

のたいりのとうもんまぢかくつかせたまいける。

まつ、ついちを御らんすれば、いしのついちを、八十よちやうにつきあげて、いしの大もんたてらるゝ。それよりうちには、くろかねのついちを、六十よちやうにつきあげて、くろかねのもんをたてたまふ。それよりうちには、しろかねのついちを、四十よちやうにつきあげて、しろかねのもんには、ゆふ日をいたいてたてられける。それよりうちには、こかねのついちを、三十よちやうにつきあげて、しらすには、きんぐのいさこをしき、ふめはさらぐりやうとなる。

御さうしは、いさこぐをふみしういて、たいりまぢかくたちよりて、やかたつくりを御らんするに、ひのきさわらのふしをゑらんで、きんぎんをちりばめつくらるゝは、けにもおもしろそ見へたりける。

御さうしは、からきのきざはし、六七けんあからせたまいて、御ざのていを、つくぐと御らんすれば、ちうなこん、さいしやういげ、ほくめんのものともか、御ざにひしとゐなかれて、みなもとを見たてまつりて、「いかにかたぐ、じやうだいにまつだいに、此たいりへ、にんげんのぢきにまいるは、ふしきなり。いかなる事ぞ」とひしめきける。

みなもと、此よしきこしめし、「わらはと申は、此やまにてかくもんいたせしせうしんなるか、けふは、ちこたち七十五人のなかよりも、はなのはんにさゝれ申て、はなをたつねいてければ、かゝるたいりを見つけしより、わらはかしよそんにそんなるは、これはまことに、とうぼうならば、やくしのしやうど、なんぼうならば、くわんおんのしやうど、にしならば、あみた

のしやうど、きたならば、しやかのしやうどかなんどゝそんなし、これまたたつねまいりてあり。かゝるみかどのすまさせたまふぞ、御目にかゝりたきよし、そうもん申てたひたまへ、かたぐたち」とそおほせける。

此人ぐは、きくよりも、「此ぎもつ共、さらは」とて、しゝいでんのたいりにまいりて、大てんくに此よしかくとそ申ける。だいてんぐは、もとよりも、三せをさとする物なれば、「いや、くるしくはなき人ぞ。それはさためて、げんじのわすれかたみに、うしわか殿と申せしは、此やまにのほりて、よきにかくもんめさるゝか、ちごのなをは、しやなわう殿申か、さためて、そのしやなわう殿にてあるへきそや、くわんたい申なものとも、びろう申な、かたぐ」と、おほせもあへず、御さをゆらりとたち、七つひとへをひきしやうぞく、ひたりおりのゑぼしをめさせたまふか、けにや、ま事にみなもとの御まへにて、わらはかひたりおりは、くわんたいなりとて、さくらおりのゑぼしを、けたかくめされつゝ、なかのさしきへゆるきいて、からかみせうしのすきまより、しのひにひとめ見たてまつりて、「あわや、さてこそ、みなもとの御いてかひつちやうなるぞ、さしきをかされ、こてんくたち」とそげぢをなす。

てんくにとりては、まつ、いちらいてんく、いつほうてんく、十二てんく、七てんく、どうじ、いつほうをはしめとして、てんくのそのかす、百人はかり、たちなかれ、なけれど、ゑんのちりをとり、ふらねと、みつをかけかへさせ、ゑやうのよき、ひやうぶ、せうじをたてなをして、たゝみにとりては、うんげん、かうらい、にしき、むらさき、あいずり、ともすり、こも

ん、しゆすのへりともを、御さにひしとしかせつゝ、あまつて
たらはぬなかきには、ひやう、とら、らつこのかはおは、しろ
かねにてへりかねわたし、こかねをもつて、五ぶんにとぢさせ
て、たん／＼にむらくもしかせらるゝ。はしらおは、こんきん、
どんきんにて、こひだりまきに、ぎつしとまき、てむじやうお
は、きんやからにしきにて、しつかとはり、かみさには、たゝ
みを七てうしかせて、しろかね、ぶんどうたてらるゝ。

そのゝち、大てんくは、あいのせうしをさりとあけ、「みな
もとの有は、ゆめかうつゝかまほろしか、こなたへ御いり候へ」
とて、かみさなる七てうたゝみへしやうじ申、わかきみは、たゝ
み三てうひきさかりて、なをりたまふ。

さて、大てんくは、とをのれんげをさしあけて、みなもとを
三とらいし申て、こてんく一人よひいたし、「いかにこてんく、
あたこやまの太郎ほう、ひゑのやまの二郎ほう、かうやさんの
三郎ほう、なちのおやまの四郎ほう、かんのくらのおせんほう、
かれら五人のてんくたち、わらは、めつらしききやく人を一人
まうけてあり、御いりあれ」と、つかいをたつる。

「うけたまはる」と申て、さしきをたち、一ときかあいたに
はしりかへりて、「たゝいま、五人のてんくたち、おまいりある」
と、申もあへす、五人のてんくたち、まいられける。

さて、五人のてんくをひきぐして、おもてのゑんにそ、まい
られける。

大てんくは、見るよりも、「いかに、五人のてんくたち、めん
／＼をこれまでしやうずるは、へちのしさいにさらになし、こ
れへ、みなもとさまの御いりあつて候ぞ、おまいりあれ」と、

申されける。

「うけたまわる」と申て、みなもとの御いりある、御さしき
にまいり、とおのれんげをさしあけて、みなもとを三とらいは
いしたてまつり、五人のなかより、せんじたこかねを三せん両
とりいたし、きんしのぼんに、みつなりのたちはなかに、見
事につみ、きみにさゝけたてまつり、しゆをさま／＼にまいら
せらるゝ。

しゆもなかには成ければ、又、大てんくは、こてんぐに、「ま
つ、たいたうのはうかうほう、さて、てんちくのにちりんほう、
これら二人のてんくたちに、わらはかめつらしききやくしん一
人もうけて有、御いりあれ」とつかいをたつる。

「うけたまはる」と申て、御しらすにゆらりとたち、三とき
かあいたにはしりまいりて、「たゝいま、二人のてんくたち、つ
くしのひこさんにて、すぐろくうつておわするか、たゝいまこ
れへおまいりある」と、申もあへぬに、とものてんくを百人は
かりひきくして、おもてのゑんにまいられける。

大てんく、みたてまつりて、「いかに、二人のてんくたち、こ
れへみなもとのほろ／＼御いて候ぞや、おまいりあれ」と申さ
れたり。

二人のてんくは、「かしこまりて候」とて、御さしきにまいり、
きみとたいきになをり申て、しゆをさま／＼にまいらす。

しゆ、つもつてなかはに成ければ、てんくは、いたるさしき
をゆらりとたち、「いかに、二人のてんくたち、わかきみの御も
てなしに、御身たち、せんそにつたわるじんづうをひとつ」と、
このまれたり。

「やすきあいたの事なり」とて、いたるところをつんとたち、なかさをさして、はしりいて、うつゝなげに見へさせたまふと見へければ、まつ、たいとうのはうかうほうか、あいのせうしをさらりとあげ、「御らんあれよ」と申された。

みなもと、つくくくと御らんするに、たいとうのきんざんしを、めのまへにひきいたして、とうしんにてかねをつくり、かうらいこくのしもくにて、ついて御めにかけるゝ、なんかいたうにひをかけて、たゝ一とうにやきやふる。

さて、てんちくのにちりんほうも、あいのせうしをさらりとあげ、「御らんあれよ」と申さるゝ。

みなもと、つくくくと御らんすれば、かすみにつなをわたし、くもにはしをかけ、しんざんにふねをうかめて、じゅうぢざいにまわさるゝ。

さて、大てんくは、さしきをたち、五人のてんくのたもとをひかへて、「いかに申さん、かたゝたち、御身たちのもてなしには、せんそにつたわるへうはう一つ」とこのまれける。

「かしこまる」とて、しらすをさしてとつており、ちやうるいすかたにさまをかへ、かすみにのつてとひあかる。四十二くわんのてんぐのひやうはうを、つゝいて御めにかけるゝ。

みなもと、ひやうはうのそのみの事なれば、はるかにゆるきいてさせたまひつゝ、よろこひたまふはかりなし。

さて、大てんくは、さしきをたち、みなもとの御まへまちかくまいりつゝ、「いかに申さん、わかきみさま、二人のじんづうも、五人のてんくのひやうはうも、すきたるか、さて又、わらはか御もてなしには、なにをかなとはせんすれ共、かなひかた

し。つきに一とおかみ申じやうどを、御めにつけたてまつるへき。あいかまへて、しやはにげかうなされつゝ、人にぎうたんなさるゝな。人にぎうたんめさるゝならば、てんばつ、みやうばつ、つきはてゝ、すなわち、めいもつきぬへし。こなたへ御いり候へ」とて、こまのさしきへしやうじ申て、まつ、ひんかしのせうしをさらりとあげ、みせたてまつるに、とうしやうこく七百六十しやうを、たゝ一めに御らんして、とうし百てうにあそはしける。みなみのせうしをさらりとあげ、みせたてまつるに、なんてんちく七百しやうの、しゆじやうのすみかを御らんして、これも、たうし百てうにあそはしける。にしのせうしをさらりとあげ、みせたてまつるに、さいてんちく七百六十しやうの、やまのたちやう、御らんして、これも、百てうはかりにあそはしける。ほくてんちくのやうたいを、五百てうにうつさせたまひて、まつせのたからとめされける。

さて、そのゝち、しゝいでんのたいりより、御いりあれとかいをたつる。大てんくは、「さらは」とて、れんちうにいりたまへは、つまの御たいは、大てんくのなさけのたもとにすかりつき、「いかに申さん、大てんく、こゝにしまうか有。まことや、しやはよりも、わかきみの御いりあるときいてあり。みつからも、しやはのものにて候へは、しやはをこいしくそんするなり。みつから、しやはよりまいりて、御身とちきりをなしそめて、昨日けふとおもへとも、七千よねんになりきふらふそや。七せんよねんのそのなさけに、へんしのいとまをたまわれかし。いてゝ、此わかきみの御めにかゝりたき」と、つまのてんくに申されけり。

やゝあつて、大てんくは、「けに、ま事、とうど、てんちく、わかつてに、ならひなきわかきみにて候へは、御めにかゝりたきはたうりなり。いてゝ、御めにかゝれ」といふ。

御たい、なのめによるこふて、御さしきをゆらりとたち、十二ひとへをひきしやうそき、あいせんわうのけしやうのまほりをかけさせ、くちにふつこをとなへ、むかふにひをいたき、女はうにしゆをいたかせ、われにおとらぬ女はうに、きぬのつまをとらせて、なかのさしきへいてられける。

みなもとは、御らんして、「あはれ、これこそ、大てんくか御たいなるへし。まことやらん、女はうは、くわしよくにあまりた物なれば、いさや、さしきをなをさん」とて、かたしけなくも、みなもとは、これへゝとの御しやうなり。

御たい、さしきになをり申、みなもとをふしおかみ、はるかにありて、御たいは、「いかに申さん、わかきみさま、てんくと申せとも、これもほんちはにんけんなり。かく申みつからも、しやはものにてありけるか、ふしきにこれへまいりたり。くにを申せは、かいのくに、ふるさととは、ふたつはしに、こきんちやうしやと申てあり。そのこきんちやうしやかひとひめに、きんひさひめとは、みつからなり。されは、みつからは、あまり、くわしよくにあまりしより、十七さいのはるのころ、くわんけんはしめてあそはんとて、女はうたちに、ひわ、こと、もたせ、はなそのやまへのほり、みつからは、ことのやくにて、くわんけんはしめてあそひしか、くわんけんなかはに、にわかにかみかせかはつときて、てんくにさそはれ、かゝるたいりにまいりつゝ、たゝいま、御身のけんさんに入たまひし大てんく

と、みつからかちきりをなしそめて、昨日けふとはそんなれ共、七千よねんすきおくりまいらせ候そや。へちにたのしみ候はねとも、こゝに、ひとつのたのしみ有。しゝてめいとおはします、二しんのおやを、月に一と、又は、二ともおかみ申か、ひとつのたのしみなり。さて、わかきみも、二さいの御とし、ちゝにおくれたまひしか、さこそこひしくおほすらん。ま事こひしくおほしめさは、つまの大てんくを御たのみあれ。それをいかにと申に、大てんくは、一百三十六ちこくを、ひきやうにめくり候そや。しかるに、御身のちゝよしとは、九ほんのしやうとに、むまれをなしておわするなり。此しやうどへも、ひゝにしゆつしは、ひまもなし。みつからか申とは、ゆめゝしらせ給ふなよ、わかきみさま」とそ申されける。

みなもとは、きこしめし、なのめならすにおほしめしけれとも、なにとなきていに見へ給ふ。

そのとき、御たいは、しゆをとりたいし、女はうたちにしやくとらせ、わか身は、くわへにまいりつゝ、「いかに申さん、わかきみさま、此しゆのさかなに、ほんちをかたつてまいらすへし。此しゆと申は、かたしけなくも、あみたほとけの六じのみやうかうと、めうほうれんげきやう、七もし五もしの、あばらかけんのちやうしたさけにてありければ、ひとつのめは、しゆにんあいきやう。ふたつのめは、人にうらやまるゝ。三つのめは、おもふ事かなふ。四つのめは、しんだいきたまる。五つのめは、五りん五たいとあらはるゝ。六つのめは、六たうのさたをひようす。七つのめは、七ふつみやうりをうるなり。八つのめは、八やうのれんげひらくる。九つのめは、くにのぬしと

さたまり申なり。そうして、いわみのさけと申は、三々九とと申て、九つかほんにて、ありければ、たゞまいれ」とて、さま／＼さけおそまいらする。

もとより、みなもとは、大しゆのことなれば、ときに九はいそほされける。みなもとの御さかつき、御たい給、御たいのさかつき、また、御さうしに、おもひさし、いとま申て、「さらは」とて、しゝいてんのれんちうさしてそ、かへらるゝ。

そのゝち、大てんくは、なかのさしきへいてられける。

みなもと、御らんして、はるかにあつて、おほせける、「いかに申さん、大てんく、われら、これまでまいる事、へちのしさいてさらになし。しやはにて、まことや、うけたまはれば、御身は、一百三十六ちこくをひきやうにめくり、又、われらかちゝよしともの、ござのじやうどへ、日々のしゆつしとうけたまはる。われらと申は、二さいのとし、ちゝにおくれて候へは、ひとしほ、こひしくそんするなり。なにとして、いま一と、ちゝの御めにかゝり申さん。そのために、はる／＼これまでまいりたり。はんしはたのみ申なり」。

大てんくは、うけ給、「いかに申さん、わかきさま、さても、御身、はる／＼と、これまで御いてなされて候へは、御もてなしに、なにをかとそんすれとも、これにおいてはかなふまし。さりながら、われとたいだんを、御そんしなされてありけるか、御そんしなれば、すこし、それよりおかたりあれ。これにて、ちやうもん申へし、わかきみ様」とそ申ける。

御さうしは、きこしめし、「いかに申さん、大てんく、われ、七つのとし、くらまへのほりて、九つまで、げんぜのがくもん

きわめ、十さいのとしよりも、さんがくのにのほり、しやうねん十三になりけるか、一千七百よそくを、てんとうろくにさとりしか、そのなかに、てんもてつへき、ちもてつへき、四ほううてつへきなるときは、これか、われとのたいだんなり。まんほう一によときくときは、さて、さんかいにかきもなし。六たうにほとりなし。ほうに二ほうなし。ほとけに二ふつはまします。これが、われとのたいだんなり。御めにかけてたひたまへ、大てんく」とおほせける。

そのとき、大てんくは、「あらありかたや、わかきみ様、さらは、御とも申へし。こなたへ御いり候へ」とて、れんちうにふかくしやうじ申て、しやはよりめされし、こそて、ひたゝれ、ぬかせ申、大たうのあけのいと、わかつてうのはすのいとにて、おりたりける、くうしのこそて、めさせ申て、やかつて、おぐしおも、ぐうしのもとゆいにて、いわせ申て、しやうねん十三のわかきみをいたき申て、ちこくをさしてそいそかれける。けに、おそろしうそ見へたりける。

やまじにかゝるときもあり、はまべへいつるときもあり、一百三十六ちこくを、めくつて御めにかけらるゝ。

まつ、ほのをのはつとたつてみへたるは、あれはなんぞとの給へは、「さん候、あれこそ、ほのをのぢこく」と申されける。たちより、つく／＼と御らんすれば、けにも、まさに、ほのおのちこくとうちみへて、たかさ百ちやうはかりのそのやまか、みちんこはいにやけくたけ、四ほううゑほのおをはつとたてけるは、けにおそろしうそ見へにける。

それをうちすき、とをらせ給ふに、ふかさ八まんゆじゆん、

ひろさ八まんゆしゆんの、ちのいけ有。「これはなにそ」とのたまへは、「さん候、これこそ、女人のおつる、ちのいけちこくて候なり」。されは、女人と申は、しやはにあるとき、月に一どのさはりあり。又、さんするときのいしやうきるいを、ぬきすて、うみにてすゝけは、かいりうわうのとかめ有。井どにてすゝけは、井どすいしんの、ふかくいましめ給ふなり。此みつくみあけ、おかにてすゝいて、こほせは、ぢじんの御身に、つるきとなつて、まかりたつ。かわにてすゝけは、三かいしゆしやうか、これをしらで、此みつくみあげ、ほとけにくやうする。しゆつけにくやう申せは、すなわち、これをふしやうしきとめさるゝなり。さて、此いけのくげんと申は、いけのおもてに、くろかねのつなをわたして、五人のおにか、五しきにへんして、いけのおもてにいて、しやはより、女人やきたるかと、いまやおそしとまちかくる。されとも、しやはにて、ごしやうぜんごんを、よくねかひたる女人とみゆるは、すくに、じやうどへまいるなり。又、しやはにて、ごしやうぜんごんも、ねかわすして、あまつさへ、こゝろにあくしん、たしなふたる女人きたれば、五人のおにと、見るよりも、われもわれもとかしやくする。かしやくせられて、かのはしを、まんなかまでわたりしか、なかよりもふみはづして、かのちのいけへざんぶとおつ。五しやくは、いけのみくすとなれば、たけなるかみか、うきくさにゆらるゝを見て、「あれこそ、とかある女人よ」とて、いけのなかよりひきいたして、うらとおもてをかしやくする。「あらくるしや」といふこゑか、さゝかにのいとよりほそく、きこゑける。

「さて、此くげんは、なにとしてのかるへき」と、の給へは、

「さん候、しやはにて、女人か、かやうの事をそんするならば、百三十三ほんのけつほんきやうをたもち、又は、ねんふつの一へんも、となへ申ことならば、なんなくくげんは、のかるへき」とぞ申されける。

それおもうちすきて、とをらせたまへは、かきたうぢごくをみせ申。たちより、みなもと、御らんすれば、がきのなおは、うざいがき、むざいがき、ちくれんかきと申て、かすをしらす。かきともか、いしをかさぬる所もあり。はなをつみけるものもあり。なかにも、がきか一人、おとりくるふて、わらいける。

みなもと、此よし御らんして、「あの身にも、おかしきことのあるやらん」との給へは、かき、こたへて、「さん候、われらか身に、おかしきことはなけれども、七世のまごか一人、しゆつけになるかうれしさに、わらひけるよ」と申ける。

そのとき、みなもと、きこしめして、「けにまこと、きやうせつにも、きうそくてんにしやうすとは、いまこそおもひしられたり。わらは、いまより、しゆつけのほんくわん、うちすてゝ、ぶしにならんとそんすれば、かやうの事をうけたまはる。さては、わか身は、とやせん、かくやあるまし」と、しんたいこゝにきわめかね、そてをかほにおしあてゝ、しのひなみにむせはれける。

さてしも、あるへきことならねは、うちすきとをらせたまいしか、しゆらたうちこくに御つきある。たちより、つくく御らんすれば、まつ、しやはにて、かたきにうたれて、かたきをうたで、しゝたるものと見ゑて、わか身をわれと、きつ、ついつせしは、ひとかたならぬくげんなり。なをも、たちより、

御らんすれば、けにも、まことに、しゆらたうちこくのことなれは、まつ、しやはにて、とききたいこをうち、ときのかねかおさまれば、我もくとしゆらにいて、こゝをせんどゝきりむすふ。まけたるかたは、にげてゆく、かつたるかたは、かちときをどつとそつくて、しんづくとひいたるは、しやはのいくさにうたかひなし。

「さて、此くけんおは、なにとして、のかるへきそ」との給へは、「さん候、ぶしかしやはにて、かやうのくけんをしるならば、うつかたきおも、かねとなし、つるきをも、しもくとくわんねんして、うつことならば、うつたるものも、しやうふつ、うたるゝものも、しやうふつする事、うたかひなし」。

それをも、うちすきとおらせたまひて、一百三十六ちこくを、うちすきとをらせたまいつゝ、いそかせたまへは、ほとなく、四ほうじやうどへつき給ふ。

さて、この九ほんのしやうどにこそ、御さうしのちゝよしともは、大にちによらいとならせたまいて、ちうそんにたゝせ給へは、四ほうの御もんに、ばんしゆきびしく、見へたりける。

まつ、ひんかしの御はんしゆには、せいしゆほさつの御はんなり。みなみの御もんには、ふげんの御はんなり。なかにも、てんくは、「きたのもんより、いり申さん」とて、きたの御もんにまいりつゝ、もんのとひらをおしならし、「こゝ、しはしあけてたへ」と、申されける。

みろくほさつは、きこしめし、「たれや、たそ」とそ、おとめある。

大てんくは、きくよりも、「いや、くるしうも候はず。しやは

よりも、てんくほとけかまいりて候。こゝ、しはしあけてたへや」と申。

みろくほさつは、きこしめし、「さらは」とて、出させたまひて、もんのくわんぬき、ひらかせ給ふか、そのおとか、とうとてんちく、わかつて、三こくにひろまつて、十二のかくと、おとつるゝ。

大てんく、申されけるやうは、「いかに申さん、わかきみさま、しやはにて、おんかく、おとつるゝは、ぜんじぜんごんをせし人のしゝ、しやうとへまいらせ給ふ、そのとき、此ひらくか、もんのとひら、もんひらくるそのおとか、たうと、てんちく、わかつて、三こくにひろまつて、さて、おんかくと、おとつるゝ。けふよりのち、しやはにて、おんかくきこゑなは、しにんあるよとおほしめし、ねんふつの、一へんもとなへたまへや、わかきみさま」とて、御さうしおは、せんさいのはなのなかにそ、かくし申て、わか身は一人、たいこくてんにまいりつゝ、「いかに申さん、大にちさま、しやはにて、御身、御こでまします、うしわか、御めにかゝり申さん、そのために、これまでまいらせさふらふ」と、申されければ、そのとき、たいにち、ときならぬ、かほにもみちをひきちらし、「こはむねんなるしいかな、しうは三世のちきり、ふさいは二世のちきり、おやこのちきりは、一せと申に、二せまでちきるはかなふまし。さりながら、ふつほうのさんせのりやくのちまたはいかに」とおといある。てんくは、うけたまはり、「さん候、それこそ、てんじやうてんげゆいがどくそんと申て、一きやうもくらからず」と申されける。

大にち、此よし、きこしめし、「あらありかたのことゝもや、さらは、こなたへ」とて、しやかのみてしに、もくれんそんじやを、つかひとめされて、うしわか、こなたへとせうしある。

御さうしは、はすの御さになをらせ給へは、ほとけは、れんげにざし給ふ。あらいたはしや、御さうしは、三せをさとりてましませ共、またにんけんの事なれば、まうしうのくもかおほいて、御こゑはかりのたいめんにて、いまたすかたは見へさりけり。

そのとき、大にち、くもをへたてゝ、おほせけるは、「いかに、うしわか、なんち、それまできたる事、しやうけみぶんの、わどうおは、なにとさたしてまいりたるぞ、とくく申せ」とおとある。

「さん候、しやうけみぶんのわどうとは、さんぜのそしにて、きていのそし、こゝ、われひらかんと、かやうにさたしてまいりて候」。

その時、たいにち、「いかに、うしわか、てんちわがうとおるたいしんとは、なにとさたしてまいりたるぞ、とく申せ」とおとある。

「さん候、てんちわがうとおるたいしんとは、てんには、九せん八かひ七なかれ、ちにもまた、九せんはつかい七なかれ、てんには、四十八てんのくもをはき、ちには又、四十九せのせきをすへ、てんちわがうとをるたいしん、かくらいぶつそく、たいさ一めん、かくのことく」と申されける。

たいにち、此よし、きこしめし、「いかに、うしわか、そのきならば、とそつのさんくわんとは、なにとさたしてまいりたぞ、

とく申せ」とおとある。

「さん候、とそつのさんくわんとは、やまももとやま、みつももとみつ、

ひきよせてむすへはしはのいほりにて

とくれはもとののはらなりけり

あぶのしんとは、かやうにさたしてまいりたり、大にちさま」とそおほせける。

たいにち、此よし、きこしめされて、「いかに、うしわか、そのきならば、こんかうのしんとは、なにとさたしてまいりたぞ、とく申せ」とおほせける。

「さん候、こんがうのしんとは、あぢ十ほう三ぜぶつ、みちいつさいしよほさつ、だち八まんしよしやうぎやう、かいぜあみたふつと、かやうにさたしてまいりてあり、大にちさま」とそおほせける。

又、たいにち、きこしめし、「そのきならば、こんがうのしやうたいとは、なにとさたしてまいりたぞ、とつく申せ」とおとある。

「さん候、こんかうのしやうたいとは、きのおんにてきにいり、ひのおんにてひにいり、みつのおんにてみつに入、かねのおんにてかねにいり、つちのおんにてつちにいり、きるもきられす、やくもやかれす、てにもとられす、めにもみへす、たゝそのまゝのしやうたいと、かやうにさたしてまいりてあり、大にちさま」とそおほせける。

また、たいにち、きこしめされて、「いかに、うしわか、このどよりも、しやはせかいへむまれをなしていつるとき、五つの

かり物ありけるか、そのかりものおは、どのほとけの御まへより、なにとやうにかりたてまつりて、五しやくのきやうかいで、しやはせかいへむまれをなす、とつく申せ」とおといある。

うしわか、此よし、きこしめし、「さん候、五つのかり物と申は、ほねは大にち、にくはやくし、ちはくわんおん、すじはあみた、きはしやかの御まへよりかりたてまつりて、五しやくのきやうかいよくして、しやはせかいにむまれをなし、しやはのゑんつき、しやうどへまいるときは、ちすいくわふうくうとさたまるなり、大にちさま」とそおほせける。

かさねて、たいにち、おほせけるは、「いかに、うしわか、そのきならは、さやうにしやはにゑんつき、しやうどにまいる、そのときに、五つのかりものゝ、かへしやうの有けるが、とのほとけうごかして、どのほとけの御まへゝ、なにとやうにかへし申そ、とく申せ」とおといある。

うしわか、此よし、きこしめし、「五つのかりものゝかへしやうと申は、きのおんどくにてきにかへし、ひのおんどくにてひにかへし、つちのおんにてつちにかへし、かねのおんにてかねにかへし、みつのおんにてみつにかへし、きをき、ひをひにかへすときに、きたつて、かせふきかへす、もとのつちくれと、かやうにゑいしたてまつりて、たるまそんしやをうごかして、五つのかり物、ほとけのおまへにかへし申そ、大にちさま」とそおほせける。

そのとき、大にち、おほせける、「いかにや、うしわか、ありかたきそ、なんじは、しか、しやうか」とおといある。

「しやうにあらず、しにあらず、くわつひてくわんにありか

たし」との給へは、大にち、きこしめし、「そのきならは、けんになしやうのいつくおは、なにとさたしてまいりたそ」。

「さん候、けんになしやうのいつくとは、かうりいつてんのゆききへてのち、とくれはおなし、たにかわのみつ、かはは五つ、みつは五しきになかるゝなりと、かやうにさたしてまいりて候」。

大にち、おほせけるやうは、「いかに、うしわか、そのきならは、しやはせかいに、せつしやう、ちうたう、ちやいん、まうご、おんしゆかいとて、五かいには、五つのしめしのありけるか、それおは、なにとさたしてまいりたそ、とく申せ」とおといある。

うしわか、此よし、きこしめし、「さん候、せつしやうかいとは、しやはにて、とかなき人をころし、やまたち、かいそく、そうして、むりなる事を、せつしやうかいと申か、そのせつしやうかひのいましめには、

むくふへきつみのたねおやもとむらん

あまのしわさはあみのめことに

と、かやうにいましめ候なり。ちうたうかいとは、ぬすみの事、ちうたうかいのいましめには、

うき草のひとはなりともいそかくれ

こゝろなかけそおきつしならなみ

と、かやうにいましめ候なり。じやいんかいとは、つまのうへにつまをかさね、そうして、人のつまとるをじやいんかいと申か。しやいんかいのいましめには、

いとゝたにおもきかうへのさよころも

わかつまならぬつまなかさねそ

と、かやうにいましめ候なり。まうごかいとは、なき事をいひかけいふ事、まうごかいと申か。まうごかいのいましめには、月をはなゆきをこほりとなかむるは

みないつわりのたねとなるかな

と、かやうのいましめさふらふなり。おんしゆかいとは、さけの事、

さけのむとはなにこゝろをゆるすなよ

よひなさましそはるの山風

と、かやうのいましめさふらふ也。せつしやう、ちうたう、しやいん、まうご、おんしゆかいとは、かやうにさたしてまいりたり、大にちさま」とそおほせける。

又、大にち、きこしめし、「しそくすいめんとは、なにとさたしてまいりたそ、とく申せ」とおほせける。

「さん候、しそくすいめんとは、かけんとうみやうぶつ、ほんくわんすいかくのことし」と申されける。

そのとき、大にち、「いかに、うしわか、そのきならば、くわこ、げんさい、みらい、三世のふかとくとは、なにとさたしてまいりたそ、とく申せ」とおほせける。

うしわか、このよし、きこしめし、「くわこ、げんさい、みらい、三世のふかとくとは、くわこにて、ごしやうせんごんをねかい候へは、げんさいにて、にんげんとむまれをなす。これも、一世のふかとく。又、げんさいにて、ごしやうせんごんをよくねかへは、みらいによきたいしんとむまるゝか、これも、一世のふかとく也。又、げんぜ、みらいは、ごしやうせんごんをよ

くねかへは、御身のやうなるほとけにあらはれ、れんけのうへにさし給ふか、これも、一世のふかとくなり。くわこ、げんさい、みらい、三世のふかとくとは、かやうにさたしてまいりたそ」とて、あふきをてんにあけさせたまへは、ありかたや、まうしうのくもか、はらりとはれて、たかいにめとめをはつしとみあわせ給ひて、むつまじけなるありさまなり。

むかしもいまも、しやはも、こしやうも、おやこのちきりはむつまじや、ほとけになりてましませとも、御そうしを、おひさまちかくめしよせて、「あら、せいじんのうしわかや、さてもゆゝしのしやなわうや」と、ゑもんをかほにをしあてゝ、さめくゝとそなき給ふ。

御さうしも、ちゝのゑもんにおしかゝりて、いまはたゝ、なみたばかりと見へ給ひけり。

そのとき、たいにち、御さうしを、ゆんでのひさにかきのせて、なみたをなかし、おくれのかみをかきなてゝ、「あら、せいしんのうしわかや、なんちらは、くわほうすくなきわかともにて、ちゝにははやくとりおくれ、かいなきはゝ一人、たよりとして、かなたごなたを、まよひありきしありさまは、みるになみたもとゝまらず。さりながら、へいけは、やかてほろびつゝ、けんしのよになるへき、うしわか」とそおほせける。

御さうしは、きこしめし、なかるゝなみたをおしとゝめ、「いかに申さん、ちゝこさま、それはともあれ、かくもあれ、さても御身は、たいにちすかたに、ならせたまひてありければ、よにくるしみはさふらわぬか、ちゝこさま」とそおといある。

大にち、此よし、きこしめし、「いかに申さん、うしわか、わ

れら、かやうに、大にちすかたになりたれば、よにくるしみは候はぬか、され共、ひとつのくるしみに、みやこに、へいけのものともか、あくぎやうたしなむ、そのときは、みるにめんほくなきまゝに、ひゝにいくさをとりければ、しゆらのくけんは、のかれかたし、うしわか」とそおほせける。

御さうしは、きこしめし、「そのくけんは、なにとしてのかれさへ給ふへきぞ」とのたまへは、たいにち、此よし、きこしめし、「いや／＼、せんふのきやうにても、かなふまし。おくのまうせいたなひきて、おしてみやこへのほりつゝ、このほとたへたるしらはたを、みやこにはつと、さしあくるをみる事ならば、なんなくくけんはのかるへき」とおほせける。

御さうしは、きこしめし、「わらはと申は、七つとし、くらまのてらへのほりつゝ、九つまで、げんぜのかくもんきわめつゝ、十さいのとしより、さんかくにのほりて、しやうねん十三と申には、かくもんきわめてありけるも、ひとつは、御ぼたひをとふらひ申さん、そのために、かやうにいたしてありけれども、さやうに、せんふまんふのきやうにても、かなふましきとのたまはは、けふよりして、しゆつけのほんぐわん、うちすてゝ、ぶしとなり、御身のかたきうつへきなり。御身は、くさのかけにて、まほりのかみとならせ給ひて、ゆみやのみやうがあらせてたべ、ちゝこさま」とそおほせける。

大にち、此よし、きこしめし、「さやうに、なんちは、かくもんきわめてありけるか、しゆつけのほんぐわん、うちすてゝ、ぶしになり、われらかかたきをうたんとおもふは、なによりもつて、しんへうなり。そのぎならば、しやはの事とも、いち／＼

かたりてきかすへし。なんち、よく／＼ちやうもんせよ。まつ、われらがせんぞは、八まん太郎よしゑは、十五のとし、かといてめされて、なをてんかに、ばつし給ふとうけ給。おそれなから、なにかしも、十五のとし、かといてなし、おくのきちじをうちたのみ、おく、おふしうへ、くたりつゝ、ひてひら、さとうを、たのむならば、やすきあいたの事なるへし。それは、なんしか、十五のとしの事、まつ、らいねん、十四のとしは、ちゝか十三ねんのきやうやうとなつて、五てうのはしにて、つぢぎりせよ。つぢぎりたにもなすならば、九百九十九人は、なんなくきつてすつへきか、千人に一人たらぬそのとき、くまのへつたう、たんそうかちやくし、むさしほうへんけいか、まいるへし。うつな、たすけて、ひくわんにせよ。かれをひくわんにするならば、ゆみやのみやうがあるへきなり。それよりして、やはたにむかつて、うちまつりなし、それよりいそく事ならば、きみのくらい、ぢうぜんじ、こまつはらといふところて、きちしをまつとき、みの／＼くにのちうにんに、せきはらいちといふものか、三十六きにきはうたせ、わか身、ともには、三十七きにて、ばんば、さめがいにて、なんしにあふて、ろしのくわんたひ申へし。あいかまへて、かりそめ事とはおもへとも、げんじのかどであるあいた、のかすな、うて。ゆんでをかたきかうつならば、めておは、われら、うつへきなり。それより、いそく事ならば、なんのしさいもあるましきか、こゝにひとつの大じあり。なんぢかはゝの、ときは御だい、なんじかあつまにくたる事、ふびんにおもひ、おつかけとめんがそのために、あとをしとふてくだるとて、みのとあふみのさかいなる、やま

なかといふところにて、くまさかと申よたうに、がいせられて、あしたのつゆとなるへきか、よしそれとても、ちからなし。これも、ぜんぜのしゆくこう也。さりながら、やかて、かたきをうたすへし。そのとき、なんぢは、みのゝくに、たるひとといふしゆく、ちうかうほうといふものゝところか、きちじかやとなるへし。そのとき、きちじかたからと申は、百まんくわんかたから、かゝるところに、くまさかは、きちじかたからに、めかくれて、おしよせ、がうだううつへきなり。あいこまへて、はゝのかたきであるあいた、のかさすうて。ゆんでをなんしかうつならは、めてをはわれらかうつへきなり。かれをうつてあるならは、かもにむかつて、ちまつりなし、それより、いそく事ならは、くにを申せは、するかのくに、ふきあけはま、かんはらのしゆく、ふちやたゆふといふものか、そのとき、きちじかやとなるへし。あら、いたわしや、なんしは、そのやとにて、ふしきのびやうに、おかされて、ばんじかきりにあるへきを、きちじは、まちかね、たつて、あつまにくたるへし。ふぢやは、やさしきものなるか、やとのおかた、しやけんにて、かならず、なんじは、ふきあけはま、六ほんまつにいたさるへし。そのまつはらにて、なんし、むなしくなるへし。よし、それとても、ちからなし。みかわのくに、しやうりり御せんにさとらせて、しやうりり、くたりて、よきにかいひやういたすならは、やかて、へいゆふなるへきなり。それよりいそく事ならは、なんのしさいもあるましき。おく、あふしうへくたりつき、ひてひら、さたうをたのむならは、やすきあいたの事なるへし。されとも、ひてひら、ひとつのあくじを申へし。これよりも、四

こく、さぬきのくに、ほうけんにつたわる、いしたまわつたる、じんづうと申まき物、ぬすめと申へし。あいこまへて、われにまかせてわたりつゝ、ほうげんかひとりひめ、みなつるによに、ちきりをこめ、かのまきものをぬすみ、それよりげがう申ならは、そのとき、ひてひら、かさねてあくしを申へし。これよりも、うしとらにあたつて、きまんこくといふしまは、おにのしまにてありけるか、おにの大しやう八めん大わうは、四十くわんのとらのまき物もちたるなり。かれをぬすめと申へし。あいこまへて、これおも、われらにまかせて、わたりつゝ、大わうかひとりひめに、ちきりをこめ、このまき物おもぬすみとり、それよりけかうなすならは、そのとき、ひてひら、五十四ぐんをもよほして、なんし、とし十八と申には、十まんよきをさしそへて、おしてみやこへのほすへし。おしてみやこゑのほるならは、へいけは、かならず、ほろふへし。四こくはやし、だんのうらかせんるとき、へいけの大しやう、のとかみのりつねか、なんしにあふて、やつほをたへと申へし。あいこまへて、のかるへし。これをも、われらかはづすへし。さりながら、こゝに、ひとつのだいじあり。あふしうのちうにんに、さたうせうしか二人の子に、つきのふか、なんしか身かはりにたつへきかよし、それとてもちからなし。これも、ぜんせのしゆくごうなり。それより、へいけはほろひつゝ、なんしかとし、二十一と申には、かならず、てんかをおさむへき。あいこまへて、なんしか、てんかのせうくんと、あふかれ申なよ。なんしかあにのひやうへのすけは、いづのほうてう、ひるかこしまにおわするを、よひいたしまいらせて、くわんとうに御しよをたて、かま

くら殿とあふき申て、なんしは、にしのくにをちぎやうして、ほりかわに御しよをたて、きやう殿とあふかれなは、なんのしさいもあるましき。はなとさかへてあるへきか。あら、いたはしや、なんしは、かちはらかざんげんにて、あにのひやうへにうたるへし。よしそれとても、ちからなし。これも、せんぜのしゆくこうなり。なんし、さきのよにてのいんくわを、かたりてきかすへし。まつ、さきのよに、らいてう、くうてう、けいじほうとて、さて、三人のひじりあり。らいてうとは、なんじかあにのひやうへの事、くうてうとは、いま、くわんれいにさたまりたる。ほうてうの四郎ときまさか事、けいしはうは、かちはらなり。そのとき、なんしは、やまとのくにのやしろにすまひする、あかきねすみにてありけるか、なにとして、けいしほうか、おいのなかへとひいりて、六十よしをめぐりありきたるくりきにて、いま、うしわかとはむまれおなす。されはにや、につほんをめぐりしとき、つむものゝなきまゝに、きやうのものしをつみければ、けいしほうに、にくしくとおもわるゝかつもり、いま、かちはらかざんげんにて、なんしかとし、三十二の四月二十八日には、あふしうのたかたちにて、あにのひやうへにおしよせられ、かならず、はらをきるへきなり。よし、それとても、ちからなし。